

● 都市再生のキーワードとしての 「水」の役割を問う

「洪水折り込み型」治水計画で
都市空間の水辺再生を図る

嘉田 由紀子

水が社会的行動に与える影響について

畔柳 昭雄

都市の水辺と生態系の健全性

鷺谷 いづみ

川からの都市再生

吉川 勝秀

都市の水辺空間と集客観光

石森 秀三

水辺からの都市環境再生へ

宗宮 功

都市の魅力を支える水辺景観と親水性

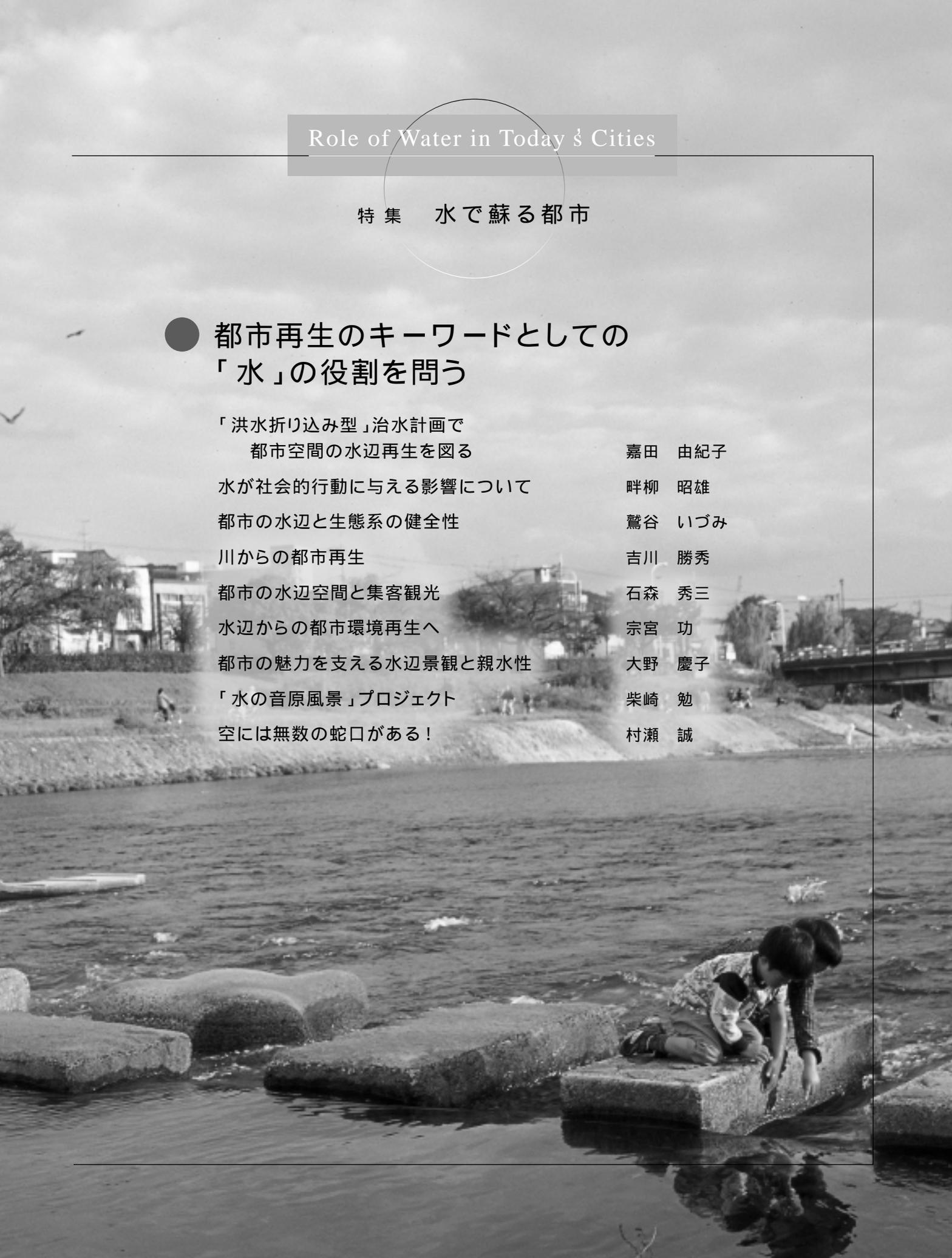
大野 慶子

「水の音原風景」プロジェクト

柴崎 勉

空には無数の蛇口がある！

村瀬 誠



「洪水折り込み型」治水計画で 都市空間の水辺再生を図る

嘉田 由紀子

Interview with
Yukiko Kada

水への憧れは 文化的に生み出されたもの

私たちは、水や水辺に安らぎや憧れを感じる
といいますが、これはある特殊な歴史的条件の
中で培われた文化のなせるわざだと思えます。
たとえば、毎年私が訪問しているアフリカのマラ
ウイ湖では、私が湖畔を『美しい』と思う感覚と、
地元ですっとそこに住んでいる人たちの感覚に
はある種の『ずれ』があります。

マラウイ湖畔に住む現地の人びとに私は、『こ
んな素晴らしいところに住めて、羨ましい』と言
つてしまうのですが、『この風景は当たり前。蚊
も出るし、水害もあるこんなところより都会に
住みたい』という返事が多く聞かえてきました。
マラウイ湖辺の村で、多くの人たちに聞き取りし
ましたが、どちらかというと、そこで生まれ育つ
た人でない、外から来た人たちが水辺の風
景を美しいと表現する傾向にあります。

また日本でも、琵琶湖辺の景観が望める家に
住む方でも、『冬は寒いし、台風が来たら風がま
ともに吹いてくるんで、あまりよいところではな
い』とおっしゃいます。つまり、そこに住んでいる
人たちが、旅人のようなよそ者との間には、風景
の評価において大きな『ずれ』があるのではない
でしょうか。ただ、そこで生まれ育つた人たちも、
いざ自分が外に出たりしますと、あらためて自
分が生まれ育つた地域の風景をなつかしみ愛で
る傾向にあるかもしれません。

『あるもの』の価値は見えず、『ないものねだ
り』という人間の勝手な思いかもしれません。
しかし、そうは言いません、多くの人が水や
水辺に憧れ、安らぎを覚えることは間違いない
ませぬ。それを、『自覚するか』『自覚しないか』
の違いはあるでしょうが、そして今の都会は、あ
まり水への配慮が欠けているのも確かです。か
ら、日本の都市に水辺を再生することは必要で
あり、重要なことと思えます。

都市における 水辺再生のための調査

日本の都市における『水辺の再生』について、
私が現在、最も関心があるのが、京都市なら、西
高瀬川^{おとわがわ}や、音羽川^{おとわがわ}のような、日本の都市の小
さな川^{おとわがわ}についてです。それがあっても忘れら
れている、川とは言えないような三面コンクリー
トの深く切り立った川、あるいは道路の下に埋め
立てられた忘れられた川、町の喧騒の中で意識
されない川。でも、それぞれに深い歴史を持って
います。そんな川でなくなってしまう川^{おとわがわ}に興
味を持っています。

それは何故か。

どうして、川が川でなくなつたのか、ということ
を歴史的に見つめ直し、調べて、行き着いた結果、ふ
たつのことを見えてきました。ひとつは車を通すこ
うな交通上の利便性を高める目的です。ふたつめ
は、水害を防ぐため、といったことです。あるいは、水



1972年9月の水害時(提供:京都市)



今の音羽川、上と同じ場所。何故カミソリ護岸の川になったのか?(提供:子ども流域文化研究所 撮影:佐本泉)

害に痛い目にあつたための災害復旧のためでした。そこで私たちは、ふたつめの発見にかかわって、各河川の「い」「ど」「ど」「ど」洪水が起きて、「ど」「ど」いつ被害が起きたのか」ということを、琵琶湖・淀川水系を中心に、現在、「二〇力所ほどでいちから調べなおしています。」

たとえば、京都市の修学院にある「音羽川」です。この音羽川が流れるのは有名な、修学院離宮に向かう離宮道沿いで、山沿いには京都市内では珍しい柵田も残っている風光明媚な地域です。ところが音羽川はそんな場所に相応しくない三面コンクリートで囲まれた深く切り立った排水路のような川です。そして、深い川底に、ほんの「ヨロヨロ」と水が流れ、ふだんの水深はわずか「センチもなく、私は最初見た時、」なんて、こんな川になってしまったのだらう」と思いました。

実は音羽川は、平安の時代からその名が知られていた由緒がある川だったので、昭和四一年と昭和四七年に大変な水害を起こし、死者さえも出ていました。その災害復旧のためという目的で、京都市により、深く掘って、「コンクリートで囲んだ川が防災目的で造られたのです。」

それを知った私たちは、その水害では、どのような被害があつたのかということ、地元の人たちを訪ねて聞き取りました。それも単なるインタビューではなく、水害に遭つた時の川の写真、そしてそれから後、どういつ風が変わつてきたのかという写真を持つている方を探し出してお借りし、それらの写真を見せながら「行つ、」写真資料提示型インタビューを実施しました。

人の記憶というものは、結構曖昧です。また、川はこうだったのよ」とか、土砂がターと来て、水が一杯になつてね」と言つても、言葉だけでは伝達できない部分があります。そこで、それを写真で再現しようというのが狙いです。

古写真を活用して環境を再現するといつ方法は、一〇年以上前から琵琶湖博物館の研究で私たちがあみだしてきたのですが、最近では、水害に対しても古写真を使って水害の記憶を復元し、記録にする、という研究をしてきました。写真を見

ながらですと、「ああ、この時、こうだった」といのがとても具体的に、そして、場の状況と合わせ複合的に浮かび上がってくるからです。また、一人よりも複数の人と一緒に写真を見てもいいですと、記憶が総合化されていき、「あの時、こうだったよな」、「水はこちら側だった」と多くの人が議論をしながら、ある像が結ばれていき、かなり当時の被害状況を正確に把握することができると分かつてきました。

また、水害に関しては、新住民と旧住民に、同時に聞き取りをするようにします。その結果、それぞれ大変認識が違つことも分かりました。たとえば、新住民の人は水害があつたということとはほとんど知りませんが、旧住民の人はよく知っているからです。

修学院の例で見ますと、旧住民の人たちが住む旧集落は離宮の目の前にあり、ほとんど水害にあつていません。一方で新住民が住むのは、音羽川沿いの新しい造成地です。それで旧集落の人たちが言つのは、「あそこはもともと堤防で川だった。それを宅地業者が堤防を崩して、竹藪を切り開いて住宅を造つたから、水害に遭つのは当たり前だ」。それを聞いた新住民の人たちは、「生活の利便さからこの場所を選んだのに、その時、不動産屋から、かつてその場所が川の堤防で、しかもその川に土砂災害があるなど、何も聞かされなかった」と言つ。旧住民の人は、「あの辺は昔は川やたんや。知つている人なら絶対にあんなところに住まない」と言つのです。

実際に地名を見ると、新興住宅街になつている辺りは、「水川原町」など、かつて川べりだ

たことを示唆する地名で、そういう意味では洪水が起つた時、真つ先に水害に遭うのはどちらかといつと新住民地域なのです。それを避けるために音羽川を、無理矢理、今のようなコンクリートの三面張りの川にしてしまつたわけです。

音羽川はもともと、川幅は一メートル深さは一メートルほどの小川で、子どもがボンと渡れるくらいの小さい水路でした。ところが昭和四〇年代に土砂災害に遭つたため、今のような深い川を掘つたわけです。川縁には落下防止のためのフェンスが張り巡らされ、子どもたちが水辺へ近づくこともできません。今や下水を流すための排水路としての役割しか期待されなくなつてしまつたのです。

確かに、地元の水害を経験している人には意味があり、「これで安心、もう水害にはあわない」という形の川なのですが、『同じ水害を防ぐにしても、もう少し生き物や風景に配慮ができないか』というのが、私たちが都市の川を再生させるために考えた提案の根本になっています。

洪水を受け入れるような都市計画を

私たちの調査で分かつたことの一つに、若い人や子どもたちは、身近に洪水が起つることを全く想像もしていないといつことがありました。しかし、それは当然なこと、近畿圏で最大の水害は昭和二八年九月二五日の二三号台風や昭和三四年九月二六日の伊勢湾台風で、それ以降、あ

まり大きな水害は起つていないため、若い世代の人は水害を体験したことがないからなのです。

大きな水害がないといつのは、それはそれでいいことなのですが、そのために最近の人は、実際に水害といつものがどついつつものまどのようにして起つるのかをほとんど知らないわけです。そして水害が自分の身近で起つるものであるといつことを考えもしなくなつていきます。音羽川の水害のように被害が出ると、災害復旧といつ名目で治水政策を進め、川を大きく深くしたことで、水害が起つりにくくなつたからでもありません。

農村部でしたら、地価もそれほど高くありませんので、「引き堤」といって堤防を横に引いて川幅を広くすることができ、都市部では地価が高いため、川の面積をできるだけ少なくする代わりに深くします。その結果、都会の川は必然的にカミソリ護岸となり、川底は深くなつてしまつた。

私たちは、今、洪水対処だけを考へて三面コンクリートにしてフェンスを張り、子どもが川に降りる場所、川に近づくと場所が何も無い排水路のよつな川の姿を変えてほしいと呼びかけています。少なくとも子どもたちが水辺に降りて、パチパチや遊ぶことができ、小魚が棲んでいて、魚とりができるくらいに状態にできないかといつことを提案しています。

そしてさらに、治水のために堤防を高くすることにも歯止めをかけられないかと考へていきます。たとえば、典型的な例は淀川の男山の辺りです。あの辺を見ていただくと、家よりも堤防が高くなつていきます。しかし、あれはあれでまた恐いわけです。堤防といつのは高くすればするほ

ど危険になります。五メートルの堤防が崩れるよりも、一五メートルの堤防が崩れる方が、物理量は数十倍になるからです。万が一、予想もしない大雨があり、一五メートルの堤防が崩れるよつなことがあれば、その被害はとんでもないことになります。しかも、これは決して架空の話ではなく、最近の日本における異常な雨の降り方を見れば、明日にでも起つる可能性がある話なのです。この夏には、新潟県や福井県では集中豪雨で堤防が決壊し、多くの人が亡くなるといつ被害も起きました(このインタビューの後、一〇月末には二三号台風が日本を襲い、近畿圏でも円山川や由良川が氾濫し、桂川、鴨川もかなり増水をし、一部浸水被害も出た)。

そこで私たちは、洪水といつものを、もっと日常的に地域で受け止めるといつ都市計画やソフトの水害対策があつてもいいのではないだろうかと思案しています。堤防をあまり高くせず、少し上を流れるぐらゐにして、いざといつ時には水が地域に入つてくるものだと考へます。そして、住民自身がその危険性を自覚して備えをします。備えがないと災いは大きくなります。洪水は自然現象です。大雨は人間の努力では止めることはできません。でも水害は社会現象です。同じ洪水でも、備えをして、うまく逃げる、やり過ごすことができれば、被害は軽減できます。

もともと、日本の国土の七割は沖積平野であるわけです。沖積平野といつのは、何千年・何万年といつ時間の中で、洪水が何度も起つたことで造られた大地です。ですから日本では洪水は起つて当たり前なわけです。そこで洪水を地



昭和10年の鴨川水害で破壊された三条大橋(提供：京都市)



今の三条大橋

域社会が、最初からある程度受け止める代わりに、川の端の堤防をあまり高くしないでおく。つまり、その地域では、いざという時に水が来た時に備えて、建物を「ロティ」(高床)方式にしたり、一階は水が来てもしいように駐車場だけにしたりして、しかも電源系統は天井近くに取り付け

ておきます。二メートル水が上がっても大丈夫だとかいったように、『洪水折り込み型』の住宅を建てることで対処するという方法も十分にあり得るはずですが、そうすれば、堤防を低くできるわけですから、日常的に川がある程度見えるようになり、川に近づきやすくなるはずです。さらに、洪水のリスクを内在化することで、日常の警戒態勢が整えられ、被害は逆に少なくなるはずですが、

『今、ダムができたからもう水害には遭わない』という思いがかなり多くの人たちの間に広まっています。行政にも責任があります。もともと洪水はゼロにはできないのに、そのことをちゃんと住民に伝えず、ダムを造ったら五〇年に一度くらいしか洪水は来ません」とそのハードの施設の効果を強調します。特にダムに伴う集落移転があったり、多額の公共投資を必要とする場合、その効果を強調しがちです。同じ洪水リスクでも、「たとえダムを造っても、五〇年に一度くらいは洪水は来ます。それは明日かもしれないし来年かもしれないし、五〇年後かもしれない」というのでは随分と人びとの認識が変わるわけです。

洪水を100パーセント防ぐことはできない

昔の日本ではたとえ京都の歴史を見ると、平安時代末に白河上皇が意のままにならぬ、「三不如意」として、賀茂川の水、双六の賽、山法師を挙げたのをはじめ、豊臣秀吉は、天正一九(一

五九一年)に、京都の周囲に「御土居」、いわゆる「輪中堤」を設け、堤防として、外からの敵の侵入を防ぐと同時に、繰り返される洪水から町の中心部を守るつもりとしました。大事なところだけが水がこないようにして、その周辺に水が溢れるのは仕方ありません。それならば被害が少ない場所です。溢れさそうというものでした。その当時は人間の技術に限界があったのかもしれない。日本では長年にわたって、そのような洪水を受けとめる対策がとられていたわけです。

ところが、二〇三〇〜四〇年の間に河川政策の基本的な思想はガラッと変わり、洪水に対して「河道閉じこめ型」が中心になってしまいました。これは、水を川の道の狭いところに閉じこめて、できるだけ早く流そうというものです。確かにこの方法は、一見合理的です。大雨が降った地域は、できるだけ早く余分な水は流して、自分ところは安全でいたい。最近、たとえば、京都の今出川辺りでも地下に雨水放水路を造っています。丸太町のところも長く工事していて、雨水下水道を造っています。これで浸水被害はなくなり、ます。「安心ください」と看板に書いています。これも余分な雨をすくに流すためのものです。

しかし、上流はそれでいいでしょうが、上流でそういう風に雨水排水対策が進んだら下流はどうなるでしょうか。今まで長い時間をかけて蛇行しているのは地下に浸透していた水が、『一気水』になるわけです。そうすると下流の河川をさらに大きくしなくてはならなくなります。つまり、河川改修が進めば進むほど、一気水が増えて、それをさらに川を深くカミソリ状にするので、都市の

川の形がドンドン深くなると、洪水に対応するた
めだけの川になってしまいます。生き物もない、
風情のない川になってしまいます。悪循環です。
これをどこかで断ち切らなくてはなりません。

それを断ち切るために、人間側が、ある程度の
洪水は受け止めよう」と考え、でも命を失うと
いうような壊滅的な被害は避ける」というような
意識をつくりだすことが大切です。そういう風に
備えをした都市計画を行うことで、一気に下流に
水の負担を与えなくてもすむようになります。

人間側の備えに合わせて洪水の水がゆっくり
流れるように、敢えて曲げるとか、遊ばせるとか
遊水池のような湿地で遊ばせる場所を造ると
か、そういう川の造り方をする。それが、私たち
が考えている新たな治水、新たな提案です。

ただ、「こういう『過激な』発言をしますと、」あな
たは、水害に遭ったことがないから、そんな気楽なこ
とが言えるんだ」というような批判を受けます。

二〇〇二年の夏、ヨーロッパのプラハで大洪水が
起こりました。市内の建物はかなりの高さまで
水没したのですが、しかし、それでも市の担当者
は洪水を起こしたフルタバ川に堤防を造る気は
ないと言います。「プラハにとってフルタバ川の流
れは欠かせないものであり、川は市民のものだか
ら」という理由からです。もちろんそのためには、
水害が起きそうならば、すぐに市民を待避させ
るなど、予防策がキチンと立てられています。実
際プラハでは二〇〇二年の大洪水で地下街が水
没し、二〇万人が避難しましたが、死者は一人も
出ませんでした。

大陸をゆったり流れるヨーロッパの川と、すぐ

に海へ流れ着く日本
の川とは事情は違っ
たかもしれません。そ
れでも水害をハード面
だけでなくソフト面
防ぐという姿勢は日
本でも参考になるは
ずです。

さらに加えるなら、
水害は、どんなにハー
ド面を強化しても一
〇〇パーセント防ぐこ
とはできないものだ
と、いつかあります。

異常気象などで予想
を遙かに越える雨が
降り、堤防が切れるようなことがあれば、高い堤
防があるので、絶対に大丈夫だ」と思っている人
たちは、何の備えもしないため、余計に被害は大
きくなります。

先ほども言いましたように、もともと日本では
水害が起こるのは当たり前なので、治
水はもちろん大前提になりますが、必ずしも洪
水を拒絶するのではなく、受け入れることがで
きる都市計画を考える。それによって、人びとの
水害に対する姿勢を養うことができますし、コ
ンクリート三面張りの川に代表される今のよう
な都市の河川とは違う、都市における川らしい
川、生き物が棲み、子どもたちも遊ぶことができ
る、そして眺めて美しい風情のある本来の川らし
い川の創造も可能になるはず。CEL

ヨーロッパ、チェコの
フルタバ川(モルダウ川)



2002年8月にみまわれた500年に一度といわれるほどの大洪水
(提供：プラハ市都市局)



今のプラハ市内のフルタバ川。美しい風景を楽しむために、堤防
をつくらない(撮影：嘉田由紀子)

(本稿は嘉田由紀子氏への二〇〇四年九月二八日のイン
タビューをもとにCEL編集室がまとめたものです)

□ 嘉田 由紀子(かた ゆきこ)

京都精華大学教授、琵琶湖博物館研究顧問、水と文化
研究会代表、子どもと川とまちのフォーラム代表、子ど
も流域文化研究所副代表、環境社会学会会長。一九五
〇年生まれ。七〇年代より、日本、アメリカ、アメリカな
どの地域社会研究の中で人と水のかかわりを研究。自
ら、地域の人たちに教えてもらうフィールドワークを進
めるかたわら、逆に地域の人たちと足下を見直す住民
研究を提案し実践する。著書は『水と人の環境史』(共
編著、御茶の水書房)、『生活世界の環境学』(農山漁村
文化協会)、『水辺遊びの生態学』(共著、農山漁村文化
協会)、『環境社会学』(岩波書店)など。